

晚飯

陸奧

今日は母上がママサンバレーの打ち上げで帰りが遅くなるということなので、私が夕飯を作ることになった。父さんはいつもどおり8時過ぎに帰ってくると思う。今、弟が買い出しに行っている。

そして今日は客がいる。私の友人、霧子だ。彼女は父親と二人暮らしだ。いつも一人で夕飯を食べているらしい。学校帰りの話で、私が今日はカレーを作ると言ったら「私も食べたい！」と豪語したので、しょうがなく夕飯に招待することにした。

「いやあ、すみませんね。ご相伴にお預かりいたします」

「まあ、たまにはいいってことよ」

彼女は古典好きで、自然と普段のしゃべり方も江戸っ子のようになる。私もそれにつられてそういったしゃべり方になってしまう。

彼女はさほど恐縮していない様子で、麦茶を飲んでいる。

「すまん。それくらいしか用意できなくて」

「なに。この季節、この麦茶こそが至高の一品でございますよ」

「それにしてもあいつ遅いな。何を迷っているのか」

「弟くん？買い物するのに慣れていないんじゃないのかい」

「そうかもしれん」

弟の名前は純という。その名に違わず、まあ純粋な子供だと思う。自分では子供扱いされるのを嫌がっているが、まだまだ子供だ。私も人のことは言えないが。

ガチャリと玄関のほうから鍵が開けた音がした。やっと帰ってきたか。待ちくたびれたぞ。

「ただいまー」

「おかえり。ずいぶん時間がかかったじゃないか」

「いやあ、あれこれ見てたら時間がかかっちゃって」

「おい、お前。材料以外にも何か買ったんじゃないかな」

「買った」

「何を」

「カステーラ。普段390円するところを、なんと今日は290円で売ってたんだよ！だから買った。俺はお買い得商品に目がないのだ」

「仕方のないやつめ」

「へへ」

はにかむと、弟は客人に目をやった。

「あ、こんにちは」

霧子が答える。

「こんにちは、純君。おじゃましてるよ」

「大したおもてなしもできませんで」

「いやいや、私はたいそうくつろがせてもらっているよ」

「そうですか。それはよかったです」

純の奴、大人ぶりやがって。それがかえって子供っぽくしているんだよ。お前を。

「さて、じゃあさっそく作るか。荷物出せ」

「あいよ」

「ええと。にんじん、じゃがいも、たまねぎ...カステラ、豚肉、よし、ひき肉買ってこなかっただけましだな。それから...あれ？おい、ルーがないぞ」

「うん？」

「ルー」

「大柴」

「違うわ。ルーだよ、ルー。カレーのルー」

「あ！忘れた！」

「まじかよ！」

忘れるとは、一番重要なものではないか。これではカレーが作れないではないか。どうするんだ、今夜の夕飯は。米しかないぞ。卵や納豆があれば、なんとかなったが、それさえも冷蔵庫には入っていない。どうする。

そこで霧子が割って入ってきた。

「カレーが作れなくなったとな？」

「ああ。どうやらそのようだ。すまん。せっかくお招きしておいて」

「いや、そうでもないぞ。調味料はあらかじめ揃っているね？」

「まあ、だいたいは」

「それじゃ、どうだい。私が腕を振るうっていうのは」

「え...いいのか？」

「うん」

「これだけの材料でなにかできるか？」

「できるできる。そうだなー。たとえばにくじゃがとか」

「おお！いいな」

「小麦粉と牛乳とバターがあるなら、クリームシチューも作れるよ」

「なんだって。お前、錬金術師のようだな」

「鋼のって呼んでくれてもかまわないよ」

「そなたが鋼の錬金術師か」

「えっへん」

純が嬉々とした表情で霧子に言う。

「おれ、クリームシチューがいい！」

なんだって。私はそうじゃないぞ。

「私はにくじゃががいい。和食が食べたい。第一、肉が豚じゃないか。シチューは鶏だ。鶏」

「えー。やだー。シチューシチュー！」

しかたがない。ここはあれだな。

「よし、じゃんけんだ」

「しょうがないなあ」

霧子が口を開く。

「私も参加しよう」

「なんでお前まで参加する？」

「んー、気分的に？」

「よし、お前も参加しろ」

じゃーんけん、ぽん！

勝ったのは…霧子だ。

「やったぜ！」

「勝者、霧子よ。何を作ってくれるんだ」

「そうだな。それはできてからの楽しみってことにしよう」

「なに…いいだろう」

「まかせてくれ」

純は少しうなだれている。

「シチューがいいなあ…」

コトコトと野菜を刻む音が台所から聞こえてくる。聞いてくるぶんには、なかなかいい手捌きのような。普段あまり料理をしない私が言うのもなんだが。さずがは父親との二人暮らし。私は霧子に声をかける。

「普段もお前がめし、作っているのか？」

「そうだよー。うちは基本自炊だね。たまに惣菜を買ってきたりもするけど」

「そっか。大変だな」

「いやー。料理も慣れると結構楽しいよ。家事全般に言えることだけど」

関心関心。近頃の若者にしては、ものがよくわかっているじゃないか。と、老獺めいたことを考えてみたりする私。

親子二人暮らしかー。どんな感じなんだろう。うちは両親ともに健康で、たまに夫婦喧嘩もすることもあるけど、だいたい仲良くやっている。こまっちゃくれた弟もまあ可愛いといえば可愛い。平和な家庭だと思う。

それに比べると霧子のうちは大変そうだな。私の考えの及ばないところで悩んでいたりするのだろうか。いつも友人と笑い合っているのが彼女の学校での姿だ。悩みを抱えているようには見えないが。

肉をじゅーっと焼いている音が聞こえる。それとともに香ばしい匂いがしてきた。食欲をそそられる。早く食べたくなってきた。純は夕方放送のアニメに夢中だ。私も昔は一緒に観ていたが、最近はめっきり観なくなった。私も人並みに年をとったということなのかもしれない。そのか

わり本をよく読むようになった。最近は専らミステリーに嵌っている。私のお気に入りには有栖川有栖だ。彼の文体が私に合っているらしく、読みやすい。霧子は文学をよく読んでいるようだが、私には文学というものがよくわからない。一度、川端康成の『山の音』を読んだが、まったくわからなかった。ただのじじいの横恋慕の物語だとしか思わなかった。私には文学の素養がないのだろう。

今度は野菜を炒めている音が聞こえてきた。ときどきフライパンを振っているようだ。これもさすがというべきか。手慣れた手つき。

同時になにやらスープらしきものの匂いがしてきた。うん。これもうまそうだ。というか、二品も作ってくれるのか。

やがて、霧子の声が聞こえてきた。

「はい、できたよー！」

純が待っていましたとでも言わんばかりにはしゃいで言う。

「やった！おなか空いたよ。ぺこぺこ」

私もさっきから腹の虫が泣いてしかたがない。

できあがったのはなにか…。

ん？これは…

「これは、なんだ。霧子」

「豚肉、玉ねぎ、にんじん、じゃがいもの中華風炒めで一す。それと冷蔵庫にもやしがあったので、もやしスープも作ってしまいました」

艶やかな炒め物。それとほかほかのスープ。じゅるり。自然と喉が鳴る。

「和食でも洋食でもなく、中華か」

「そう。和洋折衷的な？」

「意味が全く違うが、いいだろう。うまそうだ。な？純」

純は目を輝かせている。

「うまそう！早く食べようよ！」

「まー待て、父さんの分をとりわけておかないと」

父さんの分をとり分けると、各々席につく。

早々と純が胸の前で手を合わせる。

「いただきまーす」

炒め物から食べよう。…こ、これは！うまい！野菜の甘みと独特の旨みが舌の上で転がる。うまし！しかしどうやって作ったんだろう。

「すげーうまいぞ。霧子。これどうやって味付けしたんだ？」

「うん？普通に炒めて、塩こしょうと、ウェイパーがあったからそれと、あとオイスターソースで味付けした。しかしうれしいね。おほめにあずかり光栄です」

純は無我夢中でむさぼっている。うまいの一言すら口にする暇もないほどだ。

スープのほうもいける。

「スープもうまい。あったまるな」

「これもウェイパーと、あとしょうがをちょこっと入れてみた」

なるほどしょうがが入っているのか。それにしてもこれらをちゃちゃっと手早く作ってしまうとは。こいつの意外な一面を見たような気がして、少し私は驚いた。

霧子が言う。

「しかし、ウェイパーがあったのはよかったね。私んちはいつも鶏ガラスープの素だから勝手が違ったけど、うまかったみたいでよかった」

「ウェイパーってそんなにめずらしいのか？」

「いや、めずらしかないけど、高いからなかなか手が出なくてね」

そうなのか。こいつが主婦に見えてきた。

「ごちそうさまー」

食った食った。たらふく食った。腹がぱんぱんだ。

「ありがとう霧子おねえさん。おいしかった！」

満面の笑みで純が言う。

「どういたしまして。こちらこそありがとう。おいしく食べてもらえたようで、嬉しいよ」

霧子も満面の笑みで答える。

ああ、平和なり。

それから一時間ほど話した後、霧子は帰ると言い出した。

「今日はありがとな」

「ううん。私のほうこそありがとう。楽しかったよ」

「そういえば、親父さんの夕飯は作らなくていいのか？」

「うん。今日はフットサルの日だから」

「ああ」

こいつの父親は週に一度、フットサルの練習を仕事終りにするという話を以前聞いたことがある。そして練習の後は即、打ち上げとしゃれこむそうさだ。事情はうちと似ていたわけだ。

「それじゃー。また明日。ばいばーい」

「じゃーな」

霧子は帰って行った。

「霧子おねえさん。また来てくれないかな」

純はバラエティー番組を見ながら言った。

「まー。またいつか来てくれることもあるだろう。でも今度は飯を作ってやらないとな」

「うんそうだね」

「今度はルー忘れるなよ。私はカレーくらいしか作れないんだから」

「わかった。絶対忘れない」

今度はとびきりうまいカレーを霧子にごちそうしてやろう。

そう思いながら、私はバラエティ番組を見て、くくくと笑った。